

市民説明会(5月13日)における質疑応答について

▶基本設計内容について

○質問者1

2,000席のサラウンド型ホールは、中型オーケストラである仙台フィルやアマチュア団体には大きすぎるのではないか。音響工学的には1,500席程度のシューボックス型の方が適しており、学生の吹奏楽コンクール等でもサラウンド型は使われていないのではないか。

○仙台市

2,000席は全国を巡回する大型の公演や合唱・吹奏楽の広域大会に対応するホールのひとつの標準的な規模と認識している。老朽化する市民会館(1,265席)等のホール機能を廃止する予定であり、そうした需要を受け止めることも目的のひとつである。また、これまで開催できなかった公演を実現するため、2,000席の方針を進めている。

○永田音響設計(小口氏)

これまでも様々なホールを手掛けてきており、2,000席でも室内音響的に優れたものができるという自負がある。サラウンド型が演奏しにくいというのは慣れの問題であり、サントリーホールも当初プロの拒否反応があったが、現在は各団体が使いこなしている。

○質問者1

コンクールでの演奏は1回だけであり、学生にとっては難しいホールになる。音響工学の専門家を入れた形で公開討論させていただければありがたいと思いますので、検討してもらいたい。

○質問者2

小ホールのパースが音楽ホールのように見えるが、演劇などで袖を使った利用はできるのか。

○仙台市

パースは音響反射板を出した状態のもの。反射板を収納すれば袖舞台が使い、演劇等にも対応できる設計としている。

○質問者3

ホルンは後方に音が出る楽器であり、背後に壁がないサラウンド型はアマチュアには厳しい。1,200～1,500席程度のホールが欲しい。また、検討に関わった市職員に音楽の演奏経験者はいるのか。

○仙台市

演奏者に背面や床面からの初期反射音が届くよう、永田音響設計と検証しながら進めている。担当者自身も高校時代から吹奏楽を続けており、演奏経験のある職員も検討に加わっている。

○質問者4

アマチュアの吹奏楽団として、350～700席のホールが最も使いやすいが抽選倍率が高く取れない。一方、大きなホールは空席が目立つ。有名演奏家が来ても県民会館が満席にならないことがある。仙台フィルが2,000席を埋められるのか疑問。

○仙台市

小規模ホールの需要は認識しており、小ホール(約350席)やりハーサル室も整備する。仙台フィルでは、一昨年度の定期演奏会のチケットが完売していると聞いている。現在の青年文化センターでは、音が響きすぎるため音を抑えて演奏しているとも聞いており、新ホールで最高のパフォーマンスができる環境を提供することで、さらなる集客につなげたい。

○質問者5

細い柱で大地震に耐えられるのか。屋根の曲面形状が建築費を押し上げているのではないかと。また、野鳥が集まり、糞害や清掃の問題が生じないか。

○仙台市

免震構造を採用しており、柱を細くしても構造安全性は確保できる。構造計算は基本設計段階から実施済みで、実施設計でさらに精査する。屋根の分節は高さ30mの建物の圧迫感を軽減し、青葉山の景観と調和させるための設計。鉄骨造で検討しており、反り上がりによる費用はある程度あるもので、安い形と言えないかもしれないが、デザインコンセプトを発揮する上での形と考えている。清掃性やメンテナンス性については基本設計でも検討を進めてきており、実施設計で詳細を検討していく。

○質問者6

屋外に農園スペースを設け、子どもの教育や多世代交流、外国人との食の交流に活用してはどうか。市の農園事業の園長にも話を聞き、実際に黒字運営で持続可能と確認している。

○仙台市

昨年度の市民ワークショップでも同様のアイデアをいただいた。どの場所でもどのように実現できるかは今後の検討となるが、市民参加の中でさまざまな活動の可能性を考えていきたい。

○質問者7

コンサートホール形式から劇場形式への可変機構について詳しく説明してほしい。びわ湖ホールはレール自走式だが、本施設はどのような方式か。200tを超えるブロックをどう動かすのか。吊り物との干渉は大丈夫か。

○仙台市

音響反射板と後方客席が一体構造となり、上部の懸垂式レールで後方に水平移動して格納する方式。客席部分にはエアキャスターを併用し、稼働時にはレールへの荷重を軽減する。一体

で動くため機構は比較的単純で、転換時間は約 1 時間以内を想定。吊り物(バトン等)と移動レールが干渉しない位置に配置しており、バトンを均一に下ろせる構造としている。

○質問者8

2,000 人規模の集客に対して駐車場 90 台は少ないのではないか。周辺に有料駐車場も不足している印象がある。

○仙台市

一般用 90 台、関係者用約 30 台を確保している。敷地面積には制限があるため、青葉山エリア全体での駐車場確保を含め、引き続き検討を進めていく。

○質問者9

屋根のデザインが青葉山の景観に合わないと感じる。クマの出没もある。立ち止まって見直すことはできないか。

○仙台市

屋根を分節することで圧迫感を軽減し、周辺の木々とスケール感を近づけて景観との調和を図るという設計の考え方で進めている。現時点ではこの方針でご説明させていただいている。

▶文化芸術事業について

○質問者1

一流の音楽を届けたいという意図と、市民に身近に楽しんでもらいたいという意図が、施設として欲張りすぎではないか。施設の稼働時間の想定、収支の見通し、夜間来場者への交通手段やホスピタリティ、クマ対策について伺いたい。

○仙台市

使用料は他都市や周辺施設の料金体系を参考に設定予定。公共文化施設は他都市でも使用料・チケット収入だけではまかなえず、指定管理料による公的負担が発生している。魅力的なコンテンツによるチケット収入の確保と、公共的事業の実施を両輪で進める。開館時間は午前 9 時～午後 10 時を基本とする。施設の来場者は、基本的に地下鉄利用を想定しており、中心部への回遊についても想定。クマ対策は周辺施設とも連携して安全確保に取り組む。1 階にレストランスペースも計画している。

○質問者2

青葉山はクマが頻出し、東北大学では電気柵を数 km 設置して対策している。公演終了後に地下鉄で 2,000 人以上を捌くのは不可能。立地として破綻している。中心部(さくら野跡地等)に 1,500 席のシューボックス型なら 300 億で建てることのできる。その方がよいのではないか。

○仙台市

地下鉄の輸送力については交通局と情報共有しており、周辺施設でのイベント時の対応実績もあり、対応は可能との認識。クマ対策は環境局の総合パッケージで取り組んでいるものと認識。さくら野跡地の再開発については、市としても後押しをしているところであり、搬入スペース等の面からも音楽ホールの整備は難しい。学術・文化が集っており、交流人口拡大の面でも青葉山エリアが最適と判断し、この立地で進める方針である。

○質問者3

チケットを買わない市民にとって、この施設はどのような恩恵をもたらすのか。鑑賞にとどまらない文化芸術のプログラムは検討しているのか。シュリンクしていく時代にこれだけの巨費を投じるのだから、福祉・教育・観光等と連携したボーダレスな文化政策が必要ではないか。

○仙台市

アウトリーチや地元人材との連携など、多くの市民が関わる仕組みを考えていく。文化庁の調査でも文化芸術体験と社会的つながりの相関が示されている。仙台フィルだけでなく、福祉・教育等の分野とも横串を刺す形で事業を展開していきたい。

○質問者4

クラシック以外(J-POP、ミュージカル、2.5次元舞台等)にも開放されるのか。芸術監督を置くのか。仙台フィルの会員規模で大丈夫か。マーケティングデータに基づく分析が必要と考える。

○仙台市

生音重視の方針だが、J-POP等を含め多様な演目に対応可能な施設となる。芸術監督の配置は視野に入れて検討中。マーケティングも重要であり、そうした人材の確保を含め、市場を開拓する運営体制を検討していく。

▶災害文化事業について

○質問者1

震災後に文化庁の芸術家派遣事業等で被災地に入ったアーティストやコーディネーターらの経験は、一般には見えにくいものの職能ともいえるノウハウを培ってきた。これらの経験者が議論できる場がなければ、災害文化の議論は深まらない。そうした場をつくってほしい。

○仙台市

活動が見えにくいことは課題と認識している。震災時にさまざまな手法で支援に入った方々の活動を可視化していくことも、この施設の役割の一つ。経験者・若い世代・有識者が一緒に考える仕組みを立ち上げたい。

○質問者2

来場者見込み 72 万人のうち、災害文化事業の内訳と積算根拠を教えてください。中心部に大

きな施設ができることで、沿岸部や他県の既存メモリアル施設の来館者を奪わないか。

○仙台市

全体 72 万人のうち、メモリアル拠点部分は約 10 万人と見込んでいる。沿岸部は津波被災の体感、中心部は過去の災害を含めた「災害を乗り越える文化」の発信と、それぞれ役割が異なる。沿岸部や他県の被災地との連携により相互に来館者を誘導する形を目指している。

○質問者3

災害文化エリアの図面を見ても、何をやる場所なのか具体的にわからない。設計が先あって中身を後から当てはめているのではないか。実施設計の段階で変更の余地はあるのか。

○仙台市

基本構想で中心部拠点の機能(メモリアル機能・災害文化の創造・発信)を整理した上で設計している。展示は、来館者が自らの日常的な生活に引き寄せて、自分ごととして気づきや考えにつなげていけるようなものになりたい。展示計画は、引き続きいろいろな方の話を聞きながら、今年度中に策定予定で、実施設計と連動して調整していく。

○質問者4

本日のスライド資料がホームページ等で公開されていない。早急に公開してほしい。災害文化エリアに繰り返し来館してもらう仕組みが見えない。学芸員や館長の体制、収蔵庫の考え方も教えてほしい。このまま進んでしまうのではないかと感じてしまう。市民がどれくらい関わっていける余地があるのか。

○仙台市

資料の公開方法は検討して対応する。展示はパネルのような完成型ではなく、来館者が自分の状況に合わせて考え、交流や表現活動に広がっていく場を目指している。複合施設の特性を活かし、音楽ホール側の活動とも連動させることで、1 回で終わりにならない仕組みを検討していく。基本構想を策定する中で、どういった機能が必要なのか議論しながら進めてきている。今後もわかりやすい説明を心がけて取り組みたい。

▶整備費用・施設がもたらす効果等について

○質問者1

建設費が 218 億から 646 億へ膨張し、市債利子を含めると 800 億を超える試算もある。人口減少が進む中で将来の負担にならないか。予算の上限はいくらと考えているのか。

○仙台市

人口減少下でも、将来の人づくり・まちづくりに資する施設と位置づけている。上限を現時点で定めるのは難しいが、青天井ではない。外壁ガラス面積の縮減など基本設計の検討の中で

コスト削減に取り組んでいることに加え、ECI方式を導入して施工者のノウハウを活かした効率的な設計・工期短縮・コスト抑制に取り組む。

○質問者2

山形市の市民会館は建設費約100億、15年間の運営費込みで170億。仙台市の年間運営費18億×15年=270億だけで山形市のホールが建つ。劇場機能やサラウンド型を盛り込みすぎてコストが膨張している。1,500席のシューボックス型なら安く音響も良い。費用対効果を具体的に示してほしい。

○仙台市

コンストラクションマネジメント業務により第三者の視点で費用の妥当性を検証しながら進めている。同時期に整備が進む宮城県の施設も500億規模であり、こうした施設整備には一定の費用がかかる。整備費の圧縮には最大限努力する。2,000席の転換型のホールは、コンサートだけでなく演劇等を含む多様な文化芸術体験を実現するための機能であり、これまでも様々な機能の検討を進めてきた結果である。

○質問者3

採算ベースに合わないのではないかと。宮城県の2,000席ホールと仙台市のホールは機能的にどう違うのか。

○仙台市

本施設は生音重視の優れた音響性能を追求し、仙台フィルをレジデントオーケストラとして位置づけている。サラウンド型で演奏者と聴衆が一体感を感じられる空間とする点、市民とプロがともに主役となる施設を目指す点が、県立劇場との違い。

○質問者4(意見)

仙台市は人口109万人を擁する東北の中心都市であり、仙台防災枠組みにより防災のまちとして世界に知られている。音楽には人を元気にする力があり、震災後も多くのアーティストが仙台に来て勇気を届けてくれた。音楽を聴きに来た人が仙台で起きたことを知り、防災について考える場になる。かつて伊達政宗も慶長地震の後に支倉常長をローマに派遣するなど、災害の後に大きな事業を起こしてきた「伊達な文化のまち」でもある。市民ワークショップ等を通じて市民の意見が反映されてきた経緯もある。市民会館や戦災復興記念館が老朽化する今、世界に誇れるホールを祈りの場としてつくることは大切であり、今つくらなければ何十年もつけない。伊達な事業である。ぜひ前向きに進めてほしいし、市民として協力したい。